様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　５月３０日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０３２００３０
研究課題名（和文）
東京音楽学校の諸活動を通して見る日本近代音楽文化の成立――東アジアの視点を交えて
研究課題名（英文）
The emergence of the modern musical culture in Japan as seen through the activities of Tokyo Music School: including the viewpoint of East Asia.
研究代表者
大角　欣矢（OSUMI KINYA）
東京芸術大学音楽学部教授
研究者番号：９０２３３１１３

研究分野：音楽学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：芸術諸学、音楽、音楽専門教育、音楽文化、日本近代史、東楽音楽学校、東アジア、留学生

１．研究計画の概要

本研究は、東京音楽学校における音楽の専門教育を事例として、日本における近代音楽文化の成立と変遷の様相を解明することを目的とする。このために、研究代表者が科学研究費補助金（平成 17～19 年度）を得て遂行した研究「近代日本における音楽専門教育の成立と展開」（基盤研究(B)）の成果であるデータ・アーカイヴを活用、その調査研究を発展的に継承する形で、同校における音楽関係資料、とりわけ楽譜の収集状況、教育課程や教授・演奏活動の実態、学生の実像などを多角的に検証し、近代日本における西洋音楽の受容と、日本伝統音楽の再編・継承が、官主導の下でどのように行われたかを解明する。この際、特に周辺諸国からの留学生の動向に注目し、東アジアの近代音楽文化形成に対し日本が果たした役割についても考察を加える。これにより、複数の文化が複雑に絡み合う動的なプロセスを多角的に分析し、近代日本音楽史を新しい光の中で描き直すことが可能となろう。同時に、本主題に関わりが深い、これまで詳細に知られていなかった各種資料を整理・アーカイヴ化し、それらへのアクセスを広く可能にすることで、日本のみならず、アジア各国における文化の近代化の問題を扱う研究者の便宜を図り、歴史・文化研究一般の進展に寄与することを目指す。

２．研究の進捗状況

(1) 楽譜収集状況の調査

東京音楽学校における最初期の楽譜受入状況については、上述した先行研究において、2665 点分のデータ入力が完了しているが、これは明治 28 年の『楽譜原簿』と現行の図書館目録カードを照合したのみであり、詳細な書誌情報については課題として残されていた。今回、これらのデータと楽譜現物一点一点との照合を行い、出版地、出版社、出版年、出版番号、頁数、サイズ、押印されている所蔵印といった詳細情報の採取を可能な限り進めている。また人名や楽曲について詳細不明なものの調査や推定、人名表記の統一等も進め、受入番号 1～325 番については、近日中にデータベースの概要と検索ガイド等を整備してウェブ上で正式公開する予定である。

(2) 公文書調査Ａ：教務文書全般

東京音楽学校の教務関係公文書のうち、大正８年から昭和 22 年にかけての合格者の入学願書全 108 冊について、新しいもの 35 冊（第 73～108 番、昭和 15～22 年）に記載されている人物情報 3168 件のデータベース化を完了した。

(3) 公文書調査Ｂ：留学生関係

教務関係公文書のうち、文書綴『外国人生徒関係書類自明治三十七年至大正〔十三〕年』には、同期間に東京音楽学校で学んだ主として近隣諸国出身の留学生の動向に関わる情報が含まれている。本年度はこの綴全１冊を撮影・デジタルデータ化し、書誌事項の解読、及びその概要について一覧表の作成を行った。

(4)「作歌」の調査

「作歌」とは広く和歌を作ることを意味するが、明治時代には既成の声楽曲〔多くは外

来曲〕に合わせて日本語の歌詞を新たに創作する実践が多く行われた。本研究では、東京音楽学校の演奏会等で歌うために行われたこうした実践に関する調査を進めている。こうした「作歌」の一部は、外来の声楽曲楽譜に直接新たな日本語の歌詞を書き込む形で残されている。これまでに、本学附属図書館所蔵の受入番号 1〜549 番までの楽譜における歌詞の書き込みの有無の調査、86 点について現物調査を完了した。また、それと平行して、『東京芸術大学百年史』所載「唱歌詞集」、及び当時の代表的な音楽関係誌である『音楽雑誌』所載の唱歌につき、題・作者・歌い出し・五線譜の有無等の一覧リストを作成した。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
本研究は、膨大な量の資料を一点一点確認しながらデータを入力していく地道なプロセスによって成り立っている。それらの成果を部分的に活用しつつ、個々の連携研究者が行った研究成果は徐々に発表されて来ている。一方、データを全体として組織的に評価する作業がまだ残されているが、そのための前提条件となるデータの蓄積と整備は相当程度進んでおり、最終年度において研究の目的はおおむね達成することができると考えられる。

４．今後の研究の推進方策
(1) 楽譜収集状況の調査
データベースを正式公開し、さらに公開できるデータの件数を増やす。明治 29 年から 30 年代にかけての演奏会プログラムとの相関関係を分析し、学会等において成果を発表する。
(2) 公文書調査Ａ及びＢ
データ入力をさらに進めると同時に、データを項目毎に分析、推移を概観し、文書の概要をまとめる。データのうち、権利上の問題がないものについては、適切な方法で公開を行う。
(3) 「作歌」の調査
所蔵楽譜における歌詞書き込みの調査やデータ入力をさらに進めると同時に、演奏の有無、背景、東京音楽学校演奏会の記録との照合、各種資料同士の照合を進め、総合的なデータベース構築と公開を目指す。また、学会等において成果を発表する。
(4) 研究成果の発表
本研究の成果については、研究代表者並びに各連携研究者が学会その他において発表に努めるとともに、ウェブ上でのデータ公開、冊子体での研究報告書の発行を予定している。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
橋本　久美子「乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校　昭和３年〜２０年――その建学の精神の具現化と社会教育論の実践――（３）」、東京藝術大学音楽学部紀要第 36 巻、査読有、2011 年、179〜194 頁。
http://www.lib.geidai.ac.jp/kiyo/mbull30.html〔全文 PDF については、平成 23 年 5 月 30 日現在作業中、未掲載〕

〔学会発表〕（計２件）
植村　幸生「東京芸大図書館蔵『中枢府重修宴契会図』にみる十六世紀朝鮮の宴礼歌舞」、東洋音楽学会、2010 年 11 月 13 日、東京学芸大学
橋本　久美子「東京音楽学校と邦楽科設置」、東洋音楽学会、2008 年 11 月 16 日、武蔵野音楽大学

〔図書〕（計１件）
塚原　康子「明治 10 年（1877）Ｓ・Ｍ・タゴールが日本に寄贈したインド楽器と楽書」、藤井知昭・岩井正浩編『音の万華鏡――音楽学論集』岩田書院、2010 年、305〜326 頁。

〔その他〕（計１件）
東京音楽学校蔵書検索データベース
http://fms.ms.geidai.ac.jp:80/fmi/iwp/cgi?-db=４．東京音楽学校蔵書&-loadframes
〔平成 23 年 5 月 30 日現在、試験公開中〕